

映画『007』シリーズを題材とした異文化理解教育の実践例

熊谷 摩耶^a

^a 湘北短期大学総合ビジネス・情報学科

【抄録】

本稿では、映画作品を題材とした異文化理解教育の実践例の報告を行いたい。当講義では学習者が身近に感じる映画作品の鑑賞をきっかけに、その映画作品の舞台となった国の歴史、習慣をはじめとする文化的な側面への興味を喚起し、異文化理解を促進することを目的としている。そこで、本稿では、学習者たちが馴染みのある映画『007』シリーズのうち、冷戦をテーマにした二作品を題材として取り上げた授業の実践例を報告する。具体的には、両作品の舞台となった国の歴史や文化、そして映画作品との関り等について、学習者がいかにして取り組んだかについての報告を行う。

【キーワード】

異文化理解、国際理解教育、比較文化、アクティブラーニング

はじめに

グローバリゼーションが進み、それに対応できるための教育が求められている昨今、異文化への興味、理解促進のための授業は必要不可欠であろう。特に、個人で情報を取捨選択し、能動的に海外の事象を理解するためのツールを身につける必要性があろう。そこで本稿では授業における国際理解教育の実践およびその効果について論じたい。そのためには、まず、国際理解教育の定義について確認する。

『現代国際理解教育事典』によると、国際理解教育は以下四つの視点から定義できるとされている。

る。¹まず、国家や民族間の文化・社会についての相互理解をはかる(1) ナショナルな視点、平和や環境・開発や人権など人類共通の課題を通して世界を理解していくための教育とする(2) グローバルな視点、様々な歴史や文化背景を持ち、地域で交流し、暮らす人々の相互理解と共生をはかる教育活動である(3) ローカルな視点、そして多様な文化的背景を持った学習者個々人の言語や非言語によるコミュニケーション・対話であり、学びのための教育活動である(4) インディビジュアルな視点、以上の4つである。²

筆者の行った授業「ゼミナールⅠ」で目指すところの国際理解教育は上記の(2)のグローバルな視点で行う教育活動である。その実践方法は詳しくは後述するが、簡潔に述べると映画作品とその舞台背景の分析を行うことで、他国の課題、現

<連絡先>

熊谷 摩耶 mayakumagai2@gmail.com

代に通じる問題を見つけ、自主的に理解を進めるというものである。そのような視点のもと、現代における異文化同士の衝突、中でも東西文化の衝突の代表例として挙げられる冷戦をテーマとした。『007』シリーズの初期作品は冷戦時代を背景としている作品が多いため、同作品を分析対象とした。現代でも起きる異文化間の衝突をテーマとすることで、その際の問題発見・解決能力とそのためのツールや方法を身につけることを目的とする。以下「ゼミナールⅠ」で行った授業方法とその効果について論じていく。

1. 講義および学習者について

本稿では筆者が「異文化理解」をテーマとした講義で実践している授業「ゼミナールⅠ」の授業実践例とその効果を考察したい。本稿では、2016年9月から2017年1月までかけて行った半期分の授業の実践例とその効果について論じたい。「ゼミナールⅠ」の到達目標として、シラバスでは以下のように記している。第一に異文化理解を促進すること、そしてそのために必要な基礎的な教養を身につけること。そして、第二に資料などを調べ、自主的に発信を行い、プレゼンテーション能力をつけることを目的としている。

調査対象者は「ゼミナールⅠ」の受講者である、総合ビジネス・情報学科の1年生18名（観光ビジネスフィールド（観光エリア）7名、観光ビジネスフィールド（留学エリア）3名、ビジネス情報フィールド3名、オフィスワークフィールド3名、ショッピングマネジメントフィールド2名）である。筆者が観光ビジネスフィールド所属の教員であるということもあるが、海外に興味がある学生が多い観光エリアの学生が最も多く、授業の中でも積極的にグループワークを行う学生が多いというのは筆者の担当するゼミナールでの5年間の傾

向である。学生は所属するゼミナールを志望する際に志望動機書を教員に提出するが、いずれの学生も「映画を観て背景にある異文化を理解したい」「映画が好きである」「発表に慣れたい」等の異文化および映画への興味を持ち、発信力を身につけたい学生が本ゼミナールを選んでおり、受講にあたってゼミナールの内容を理解し、ある程度の意欲もあることが確認できる。次に、授業の実践例について述べたい。

2. 授業実践例について

(1) 映画鑑賞（2回）

まずは映画作品の選出基準について述べたい。映画の基本的な選出基準として、学生たちの半分近くは知っているであろう著名な作品であること、そして作品に何かしらの時代背景を有する作品を選定している。なお、選定する基準としてはその他に①「異文化について学んでいる」という意識を持つだけでなく、興味を持てる内容であること②暴力的なシーン、性的描写が比較的少ない映画の二点を考慮している。特に、後者は数名ではあるがそのような過激なシーンに嫌悪感を抱き、理解が進まないという学生も過去にいたため考慮するようにした。

それらを考慮したうえで、英国の小説家イアン・フレミングによる人気スパイ作品『007』シリーズを取り上げた。フレミングが1964年に没後、今でもその人気は高く遺作は映画化されているのは周知のとおりである。

アルバート・R・プロッコリによる『007』シリーズのオープニングがバラエティ番組をはじめとする様々なメディア作品でオマージュされているものが多く、アクション映画を好まない学生にとっても身近なのではないかと考えた。「『007』はわからない」と答えた学生も授業の冒頭でオープニ

ングを見せたところ「見たことがある」と答えた学生が大半であった。

しかし、『007』シリーズは調査時点でも24作品あり、どの作品を選ぶのかということも重要となってくる。そこで①学生にとっても身近な日本を舞台にしている②ソ連と英米の対立がわかり易い作品③異文化間の衝突が描かれている作品にすることとした。また、冷戦構造が映画作品にどのように描かれているのかを理解するために作品を複数観ることとした。そこで、以下の二つの作品を選定した。

①『007 は二度死ぬ (原題: *You only Live Twice*)』

同作品は、映画化された第5作目の作品『007 は二度死ぬ』である。舞台は香港にはじまり、香港の海底で英国の潜水艦に乗り込んだボンドは、今回のミッションは米国のロケットとその乗組員が忽然と宇宙で消息を経ったことでソ連と米国間の緊張が増していることを告げられる。そして、そのヒントが日本にあることを伝えられ日本に発つ。その後、ソ連の発射したロケットと乗組員も大気圏で消息を絶ちいよいよ、ソ連も米国の報復と考え一触即発の状態となる。しかし実際は世界征服をたくらむ組織スペクターがソ連と米国の対立を促進しており、それを解決すると米国とソ連の緊張が一時的に緩み第三次世界大戦を防ぐのであった。

②『ロシアより愛をこめて (原題: *From Russia with Love*)』

次に『007 は二度死ぬ』ではさほど登場しなかったソ連に学生が注目するよう、第2作目の作品『ロシアより愛をこめて』を選定した。実際のイアン・フレミングが記した作品順でいうと5作目であり、①の作品との時系列も影響がないと判断した。

今回のボンドのミッションはソ連からの亡命を望む美女ターニャの保護、そして何よりもソ連の

暗号解読機レクターを受け取ることにあった。依然として冷戦状態は続いており、ソ連を出し抜くためには必要な機械であった。舞台はトルコであり、異国情緒あふれる作品である。

このように、両作品とも冷戦が舞台背景にあり、その冷戦構造があるという事だけを知っていることが作品理解、ひいては冷戦への理解につながると考えた。

(2) 映画作品の背景知識の解説 (30-40分)

次に、映画鑑賞前に映画の舞台背景として1960年代の米ソの対立があることを学生に伝え、それがなぜなのか、という点を学生に問う。この時点で、冷戦構造が背景にあることを答えられる学生は非常に少ないため、冷戦について簡潔に説明を行う。その後授業を2回に分けて映画を全員で鑑賞した。その理由として授業時間外で観ることが難しい学生がいるという時間的な理由がある。また授業後に映画に描かれる歴史事象や、人間関係、表現等における質問があったためシーンの解説が必要と判断したためである。そのため、映画の後半を観る際には前回の内容を5分程度で要約し、学生たちに内容を思い出してもらい、そのうえで後半を観てもらった。

(3) キーワードの決定

映画を鑑賞後は映画の感想、理解できなかったシーン、「映画を分析したい(出来る)キーワード」を複数記入してもらった。この時は第一回目の分析ということもあり、筆者が「ソ連」「冷戦」「トルコ」「冷戦と日本」の4つのキーワードを提示し、それぞれ分析したいキーワードを優先順位をつけてコメントに書いてもらった。各グループ4-5名で構成し、グループの構成員は普段から学生が接点を持っていないグループメンバー、および個人の人々の特性に留意しつつ選別した。その後、グルー

ブ毎にメンバーで話し合い、テーマを掘り下げるよう指示をする。

(4) 発表準備

発表準備は、約2-3週間、図書館にて各グループで準備を行わせる。発表準備を図書館に選出した理由として、第一に書籍の資料があること、ノートパソコンなどの発表に必要な機器があることが挙げられる。本論の主題からそれるので本稿では割愛するが、学生には(3)の後に発表方法、レジュメの作成方法などを講義形式で教えているので、発表の準備の際はその際に授業内で使用され

た資料等を用いて各グループはパワーポイント、レジュメなどの資料作成へ移る。

(5) 発表

各グループは5分でパワーポイントを使用した発表を行う。発表後、各グループでプレゼンテーションへの点数をつけ、各グループは必ず一つは質問をするよう指示を行う。質疑応答では、各グループの代表者が発表者へ良い点と、改善点を述べ、そのうえで質問を行う。

3. 授業効果

授業効果について論じる前に、学生たちがどのような発表を行ったかについて述べる。学生たちが2.で述べた手順(3)で筆者が与えたキーワードを基に各グループで行った発表タイトル、レジュメに記してある発表の章立てを紹介する。

キーワード	発表タイトル	発表の章立て
ソ連	映画『ロシアより愛をこめて』『007は二度死ぬ』とソ連表象	①映画についての諸情報 ②ソ連について ③映画におけるソ連の描かれ方 ④歴史と映画の描かれ方の比較 ⑤結論
冷戦	冷戦～THE COLD WAR～—映画『007は二度死ぬ』を鑑賞して—	①冷戦とは ②資本主義と社会主義 ③二つの世界 ④『007は二度死ぬ』のシーンから読み取れること ⑤日本の状況 ⑥まとめ
トルコ	映画『ロシアより愛をこめて』と冷戦時のトルコ	①冷戦について ②日本と冷戦の関わり ③歴史と映画の比較 ④映画における日本の描かれ方 ⑤結論
冷戦と日本	日本と冷戦—『007は二度死ぬ』—	①トルコについての諸情報 ②冷戦時のトルコについて ③実際と映画の比較 ④結論

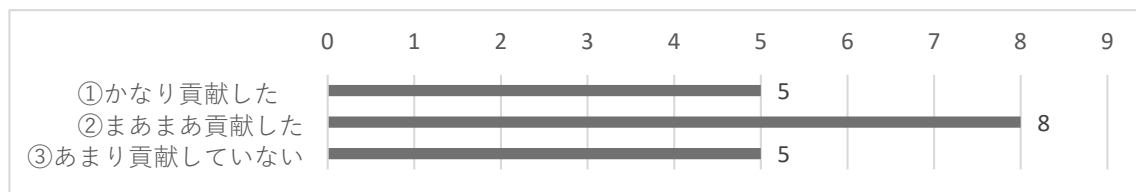
「発表の章立て」の項目をみてわかるように、発表の前半で映画の背景となる歴史的事象を整理した後、後半では映画のシーンとの比較をすることで、なぜそのような描かれ方がされたのかという点を発表していることが確認できよう。それらを行うことで、映画を娯楽作品としてみるだけではなく、映画に描かれている事象を理解することで、教養、そして平和などの時代が変わっても人類の課題とされる

映画『007』シリーズを題材とした異文化理解教育の実践例

価値に気づき、自主的に学んでいくことを目的としている。次に、2. で述べた(1)～(5)の手順後、どのような効果があったのかを学生アンケート結果を基に述べていきたい。

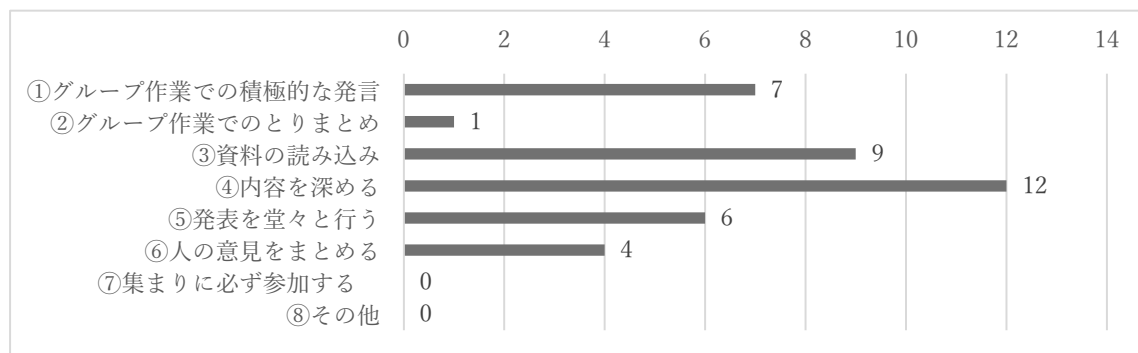
まずは、(4)(5)の手順でのグループワークにおけるアンケートである。

【設問1】グループでの準備、発表に自分はどのくらい貢献をしたと感じますか？



このように、学生の中では②の項目が最も多く事項評価として出ているのがわかる。ここでいう「グループでの準備」というのはディスカッション、資料調査、パワーポイントの作成等の作業を指す。学生たちのアンケートの結果を見るに、③を選んだ学生たちはグループ内のリーダー格の学生に任せることが多かった、等の反省を書く学生が見受けられた。

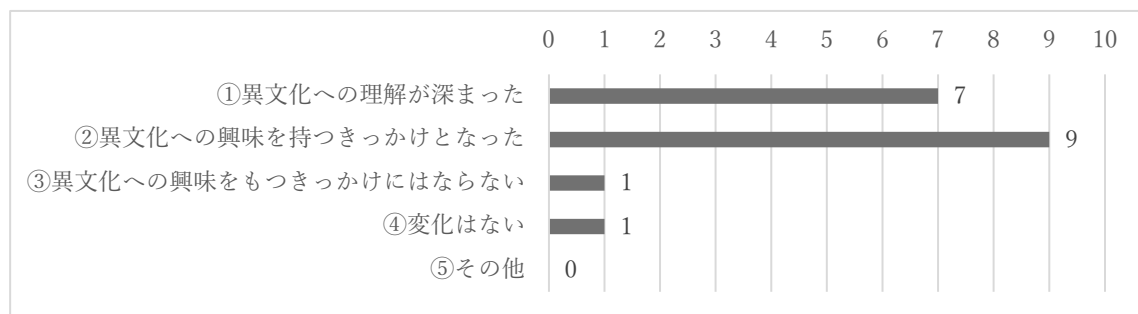
【設問2】次回以降の発表で、どのような点に気を付けたいと思いますか。(複数回答可)



また、グループワークの中の反省点でも④「内容を深める」が最も多く、次いで③「資料の読み込み」①「グループ作業での積極的な発言」と資料作成の面での反省点が多いのが読み取れる。つまり、学生たち自身第一回目の発表に対し、改善できる点があるということを現時点で意識していることが確認できる。次に、異文化理解の点である。

【設問3】 両映画を鑑賞後、このように各自のテーマで分析する前と後でどんな気づきがありましたか。選択肢を選び、具体的に記してください。

1. 異文化への理解



このアンケート結果から見るに、学生には異文化への理解が深まるきっかけとなったと映画作品の分析を通して過半数が述べていることが確認できる。すなわち、授業で目標としていた異文化理解の促進がなされているといえるのではないだろうか。

さらに、続く設問4にて「映画への理解が深まりましたか」と質問したところ、その結果①映画への理解が深まった（17名）②映画への理解が深まらなかった（1名）であった。そこで、選択肢への理由を説いたところ、以下のような結果にまとめられた。以下、学生からのコメントを抜粋する。

<異文化への興味促進>

「『007』は名前を知っていましたが、内容は知りませんでした。『007』の映画では歴史との関係性があることで歴史について知りたいと思うようになりました。」

「『007』をみたことで理解が深まり、調べることが出来た。」

「ロシア、アメリカ、イギリスの冷戦時の関係性がよく分かった。」

「トルコが活躍しているものだと思っていたが、もっとその理由を深く調べていきたい。」

「映画の作られた背景への理解は深まったが、スペクターやボンドの関係性などを理解するのに時間をかけてしまい、冷戦への理解を深めることは出来なかった。」

このように、『007』を題材としたことで冷戦への理解が進んだ、と作品選定への好意的な評価がある一方、映画の中の人物関係の理解に時間がかかり、冷戦までの理解が進まなかった学生がいることも確認ができた。理解が進んだ学生の中には、より自分でも理由を調べていきたいという自主性が見られる回答もあった。さらに、今回『007』シリーズを選んだことで、冷戦構造への理解が進んだか否かという点を確認したところ以下のような結果が確認できた。上記同様、学生からのアンケート結果を抜粋する。

<映画の効果>

「うまく冷戦の背景がありながら、映画として面白かった。」

映画『007』シリーズを題材とした異文化理解教育の実践例

「本来の歴史と映画の描写が違うところなどを比較して考えていく中で冷戦の理解を深めるのは難しかった。」

「場面の切り替えが早く、少し難しかった。」

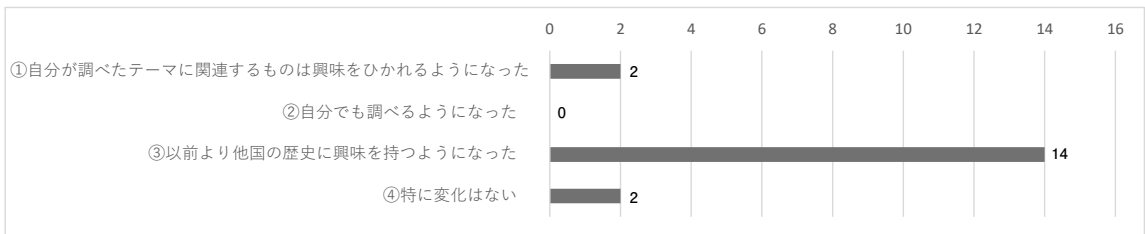
「冷戦のみを描いた映画を観たい。」

「核実験や宇宙開発についてもっと詳しく触れている映画がみたい。」

このように、場面展開が早いなどの指摘が確認できた。これは、アクション映画の要素があったり、受講生の多くが普段は邦画を好んで鑑賞することも要因の一つであろう。冷戦構造を理解する上では学生たちにとって少なからずきっかけとなったのが確認できる。

しかし、本講義が目的とするのは授業内だけではなく授業外でも自主的に異文化への興味を抱き、理解を自主的にする姿勢を有することである。それに対しては以下のような結果となった。

<自主的な発信>



上記のように③「以前より他国の歴史に興味を持つようになった」という項目が圧倒的に多くなっており、分析結果を発表したことが学生たちの異文化への興味に繋がっている点が確認できる。しかし②「自分でも調べるようになった」という項目への回答がないという点が今後の課題である。この点こそ時間をかけて、知識だけではなく異文化への対峙の姿勢として身につけるべき項目である。すなわち、興味を持つだけにとどまらず自主的に調べ、授業外での発信を担う、というのが異文化理解の姿勢に繋がるであろう。

おわりに

以上、国際理解教育の実践例の一つを述べてきた。映画作品を特定のキーワードを用いることで資料の読み方、選出方法、分析を通して学生の異文化への興味を促してきた。学生たちの異文化理解の一端としては、3.の授業効果の表で述べたように、筆者はキーワードを与えたが、それ以降はグループ毎に多様な視点で映画を分析しているの

が確認できる。結果として、映画作品の選出は学生からの評価は低くなかったものの「自分でも調べるようになった」という自主性が育ったとはいえない。これは、あくまでも1年次の第一回目の授業の結果であり、即座に効果が出ないことは想定内である。今後引き続き学生たちの異文化理解への姿勢を促し、どのように変化していったのか

を論じていきたい。

【主要参考文献】

日本国際理解教育学会編著『グローバル時代の国際理解教育—実践と理論をつなぐ—』（明石書店、2010）

日本国際理解教育学会編著『現代国際理解教育事典』（明石書店、2012）

日本国際理解教育学会編著『国際理解教育ハンドブック—グローバル・シティズンシップを育む—』（明石書店、2015）

【脚注】

1 日本国際理解教育学会編著『現代国際理解教育事典』（明石書店、2012）12-13頁参照。

2 『現代国際理解教育事典』3-4頁参照。

The Practice of Cross-Cultural Understanding Class in Using the James Bond films

Maya KUMAGAI

【abstract】

The aim of this paper is to discover the effect of cross-cultural understanding using films in class. In class, 18 students watched 2 films *From Russia with Love* (1963) and *You Only Live Twice* (1967) which are both mentioned about Cold War. As a result, the students evaluated that watching and doing the research of the films did help them understand the other countries' culture, but did not completely motivated them to do the research by themselves outside of the class.

【key words】

Cross-Cultural Understanding, Education for International Understanding, Comparative Culture